

News! the 世界遺産

いざかまくらトラスト発足記念・いざかまくら塾第1回 伊藤正義さん講演「鎌倉を護る龍神」を開催

6月29日(日)、鎌倉商工会議所ホールで、いざかまくらトラスト主催、推進協議会共催により講演会が開催され、いざかまくらトラスト代表で、鶴見大学教授の伊藤正義さんが講演しました。以下はその要旨です。

いざかまくらトラスト発足のきっかけ

去年の10月に鎌倉に招かれて、鎌倉の周囲の山が龍体、龍神に見立てられ、それに護られているという話をしました。また母の胎内に抱かれているような、武士たちにとって安心できる憧れの理想境だったという話をしたところ、ちょうどいろいろな場所で緑地保存を考えている市民の方々から、それは非常にいい概念なので、ぜひそれを広めて保存運動につなげようということで、私がトラスト運動の代表にということになりました。私は13年間、文化庁で遺跡の保存・調査をしてきましたが、本来、文化財を護る、歴史遺産を護るという主体は地元、地域にあるのではないかと考えていました。御谷を護る運動、古都法の成立のきっかけになったのがこの鎌倉です。鎌倉が日本のトラスト運動の出発点であったということは、世界遺産をめざすうえでも大きな足掛かりのひとつになります。

鎌倉城という言葉が独り歩きしていた

今から10数年前に、鎌倉市の世界遺産登録がなかなか進まない段階で、城塞都市という言葉を使って京都や奈良と差別化しようという動きがありました。ちょうどその頃、実は鎌倉城はないのではないかということを最初に精密に論証した、中澤克昭さんという人の論文が出たこともあり、また、それまで一度も、鎌倉の山稜部の本格的な調査が行われていなかったため、平成11年から2年間かけて山稜部の発掘調査を行いました。結論をいうと、鎌倉の初期、12世紀末に上る遺構や遺物は一つもませんでした。山稜部に遺構や遺物が出始めるのは、日本が蒙古の襲来を受けた13世紀の後半からだと分かったのです。

鎌倉は、先祖の霊と神仏に護られた安心の地

頼朝は鎌倉を本拠地とすることによって、父義朝や最初に鎌倉を本拠地に定めた頼義等祖先の力を身に着けることができると考えていました。頼朝は、自力で、京都の朝廷を支配する後白河院に逆らって、自分の実力でこの東国を支配していきます。そのために、神仏の加護、先祖の加護を受けないと持ちこたえられないのです。鎌倉は先祖の霊があり、また元八幡社にいた観音菩薩によって護られた地

です(五味文彦)。そして、大倉幕府は内陸にちょっと入った隠国型の非常に安心できる空間でした(樋口忠彦)。つまり、頼朝が鎌倉を選んだのは、先祖の霊と神仏に護られた、安心できる空間だということがポイントだと考えています。

日本は龍体によって護られる

県立金沢文庫に「日本図」の一部が伝わっています。日本を密教法具の独鈷杵に見立てて、その周り、日本の周囲を龍が取り巻いて護っているという絵です。これは、モンゴルの脅威におびえる鎌倉幕府が、蒙古調伏の加持祈祷に使ったと考えられています(黒田日出男、西岡芳文)。また江ノ島の縁起に、弁財天が龍を飼いならして鎌倉を護らせたという伝承があります。



江ノ島と鎌倉の山稜地形図
明治一五年測量陸軍迅速図から作成

私は明治15年ころに測量した陸軍迅速図、江戸時代とほぼ同じ景観を保っていたころの地形図から、腰越と龍口寺の間の谷が龍の口に見えることに注目しました。研究の結果、龍の口の刑場跡は、鎌倉時代には神戸川の河口あたりだったと考えています。龍神は日本を取り巻いているだけでなく、鎌倉の山を龍に見立てて鎌倉を取り巻いて護っていると考えたのです。高僧たちは加持祈祷によりその龍を元気にしてモンゴルの襲来から日本を護ろうとしました。

古都鎌倉の景観を次の世代に伝えるために

私たちは、龍によって守られていると、祖先たちが考えた、この素晴らしい景観をできるだけ損なわずに次の世代に伝えていく義務を負っております。ところが、法の網が及ばない、規制が及ばないところでは、ミニ開発によって、龍の体がどんどん蝕まれています。私たちは現在と将来のことには非常に思いを馳せます。しかし私たちがいま生きていることを考えたら、実は私たちは、死者たちとの契約によって、現在の命をいただいているのです。世界遺産に鎌倉を登録するということは、この龍神の龍体を護り、死者の恩に報いることなのです。